



筑紫女学園大学リポジット

Studying the Seihaku Mirror and Inscriptions
Excavated from the Tateiwa Site with Reference
to the Quotation of "Jubian" in "Chuci"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐伯, 春恵, SAIKI, Harue メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/315

立岩遺跡出土「清白鏡」及び銘文に関する一考察 — 『楚辞』 「九弁」の引用を手がかりに—

佐 伯 春 恵

Studying the Seihaku Mirror and Inscriptions Excavated from the Tateiwa Site with Reference to the Quotation of “Jubian” in “Chuci”

Harue SAIKI

はじめに

1 立岩遺跡出土の「清白鏡」銘文と『楚辞』

弥生時代の日本には青銅器といった中国の文物が伝来したが、特に、鏡は権威を象徴するものとして好まれ、その多くが大陸に近い北部九州へ伝わった。福岡県飯塚市の遠賀川上流に臨む弥生時代中期後半の立岩遺跡からは、甕棺より10面の前漢鏡が出土している。⁽¹⁾

その中の「清白鏡」という鏡の銘文（金石の器物に記された文）には、漢隸（隸書体）の漢字で刻まれた『楚辞』からの引用がある。「清白鏡」とは、「絜清（精）白而事君…」という文言から銘文が始まり、下の表に示す類がある。鏡によって誤字・脱字が見られるが、これは鏡の大きさによって字句が決定されていたためと考えられている。下記の表中1、2の「重圏」とは鏡背面の外側（外銘帯）と内側（内銘帯）に二重に銘文がめぐらされた形式の鏡である（鏡の形状は、表下の図1）。また、表中3、4の「連弧文」とは、鏡背面の外側に銘文、内側に半円弧形を連環状にめぐらせた形式の鏡を意味する。（鏡の形状は、表下の図2）。

表0

1	重圏 「清白鏡」 (2号鏡)	外銘帯銘文	絜精白而事君 懷靡美之窮咷	窓而汙之舛明 外承驪之可兌	伋玄錫之澤流 思窳佻之令京	恐疏遠而日忘 願永思而毋絕
		内銘帯銘文	内清質以昭明	光輝象夫日月	心忽揚而願忠	然壅塞而不泄

2	重圈 「清白鏡」 (3号鏡)	外銘帯銘文	絜清白而事君 懷靡美之窮愷	窓汙驩之舛明 外承驩之可說	伋玄錫之流澤 思窳佻之靈京	忘疏遠而日忘 願永思而毋絕
		内銘帯銘文	内清質以昭明	光輝象夫日月	心忽揚而願忠	然壅塞而不泄
3	連弧文 「清白鏡」 (5号鏡)	外銘帯銘文	絜清白而事君 懷靡美之窮愷 清光哉宜佳人	窓汙志驩之舛明 外承驩之可兌	之玄錫之澤流 慕窳佻之令京	恐疏遠而日忘 願兮永思而毋絕
4	連弧文 「清白鏡」 (8号鏡)	外銘帯銘文	絜精白而事君 而靡美人窮愷	志汙驩之合明 外承驩之可兌	伋玄錫而流澤 慕窳佻之靈景	而恐疏而日忘 而永思而毋絕



銘文に刻まれた『楚辞』とは、戦国時代の楚という国の歌を集めた詩集で、作者は屈原（前343頃～前277頃）とその弟子宋玉らである。「兮」字句の多用を特徴とし、古来より楚の土地は巫との関係が深いことから、宗教辞令から発展した読誦韻文形式の文学であろうと考えられている。

「清白鏡」銘文と『楚辞』に関する先行研究には、大まかに分けると以下のようなものがある。

1 銘文の掲載について

①清代の学者錢坫が銘文を『浣花拜石軒鏡銘集録』に載せた。

2 銘文の解釈について

①孫星衍が『続古文苑』で銘文の文体が『楚辞』の「離騷」に似ていることに注目した。

②富岡謙蔵が、孫星衍の積読と『楚辞』との比較を紹介した。⁽²⁾

③駒井和愛は、「清白鏡」や類似の鏡の銘文は『楚辞』の影響を受けて作られたとした。⁽³⁾

④岡崎敬（以後、本稿では、同氏を岡崎(敬)と記す。）は、銘文に該当する語句がみられる『楚辞』の文辞について、従来の研究を一步進めて発表した。⁽⁴⁾

⑤石川三佐男は、立岩遺跡の甕棺墓出土の「重圈清白鏡」、北九州筑紫野・朝倉域の東小田峰十号甕棺墓、佐賀域の二塚山十五号甕棺墓出土の「連弧文銘帯鏡」を例に挙げ、『楚辞』中「九章」からもっとも多く引用されていることに注目した。立岩遺跡出土分については、「中国前漢「重圈清白鏡」の銘文群との関わりの中で触れることにとどめる」とある。⁽⁵⁾

⑥三沢玲爾は「楚辞と漢鏡銘」で、銘文に『楚辞』の影響が認められることは、当時の歌謡や「漢賦」と密接な関係があったことを指摘した。⁽⁶⁾

2 「清白鏡」銘文に関する二つの異なる見解の発見

さて本研究には、先行する学部の卒業論文があり、「清白鏡」の銘文に見られる『楚辞』の引用例について、先行研究に漢籍データベース⁽⁷⁾の調査を加えて考察を試みた結果、銘文には『楚辞』「九章」「九弁」からの引用が多いことが判明したため、拙論「福岡県立岩遺跡「清白鏡」銘文と屈原の文学—『楚辞』の「離騷」「九章」「九弁」の引用から—」にまとめた。⁽⁸⁾

その後、修士論文の研究の過程で、この立岩遺跡の「清白鏡」銘文の捉え方について、次の全く異なる二つの見解があることを知った。

①第一の説は、林 勉「上代文献の本文訓読をめぐって—立岩出土前漢墓・萬葉集「日香天支」・田中本心神紀など—」⁽⁹⁾に掲載されているもので、鏡の銘文に通じる字句と心境が、『萬葉集』に見られることから、弥生時代の日本人に「清白鏡」の銘文が文学的覚醒のレベルで受け入れられたとする見解を述べている。同氏の論文の該当部分を以下に引用する。

後代になるが萬葉集でも、

真^ま十^そ鏡照るべき月を白妙の雲か隠せる天つ霧かも（巻7 1079）

真^ま素^そ鏡清き月夜^{つくよ}のゆつりなば念ひは止まず恋こそ益さめ（巻11 2670）

我^わ妹^ぎ子^もし吾^こを念^まはば真^ま鏡照^そり出づる月の影に見え来ね（巻11 2462 柿本人麻呂歌集）

立^はち易^かり月重なりて遇はねどもさね忘らえず面影にして（巻6 1794 田辺福麻呂歌集）

など、また岩戸神話の天照大神と八咫鏡、八千矛神の歌謡の「朝日のぬみ栄え来て」などと相通ずる心境を鏡銘が持っている。これらが鏡銘からの直接影響ということは勿論できないけれども、この鏡銘の内容が、当時の日本人に何らかの影響を与えて文学的な覚醒または共感を与えたことはいえるのではなかろうか。

②第二の説は、中国の鏡を模倣して作った仿製鏡をはじめとする弥生鑄造集団が作った鏡は文字を文様化したに過ぎず、文字を実際に見たことがなく書けなかった、また、支配者の方も銘文を正確に写すことを要求しなかったというもので、『日本の古代 第14巻 ことばと文字』「8 文字と記号」⁽¹⁰⁾で、岡崎晋明（以後、本稿では、同氏を岡崎(晋)と記す。）が次のように述べている。

弥生時代の権力者たちが屈原の故事を知り、吉祥句の文章を理解していたかという、はなはだ疑問といわざるを得ない。それは当時日本で作った鏡、仿製鏡の銘帯部分を見ればよくわかる。

岡崎（晋）の説に言う時代背景については、西谷正が「日本古代の土器に刻まれた初期の文字」⁽¹¹⁾で次のように述べている。

日本列島において文字が出現するのは、周知のとおり、弥生時代中期後半つまり紀元前

後からのことである。それは舶載銅鏡に刻まれた銘文すなわち篆書体や隸書体の漢字であり、中国の前漢から伝来したものであった。その当時、日本列島の住民、もっといえば、それら銅鏡を所有した地域社会の首長層が、そのような漢字の意味を真に理解し、また、漢字を用いて文章を自由に書くというようなことはなかったと思われる。というのは、弥生時代後期の仿製鏡の中には、明らかに漢字をモデルとしながらも漢字の書体をなさず、文様化していることがしばしば認められるからである。

鶴 久も「古代の表記法について—比較文化・文学の視点から—」⁽¹²⁾で次のように述べている。

漢字が本邦に渡来し、上代人が初めて文字に接した時はおそらく模様と思ったのであろう。仿製鏡に於ける文字の配列はお手本の漢鏡とは相違して文をなしていない。のみならず、文字の篇旁さえも入れ替っている。見た目に美しいように装飾として変化をつけ、自由に配列したものと推測される。

こうした第二の説に対応する内容について、第一の説では、林論文に「そもそも文字であることの認識があったか、否定的な説がある」⁽¹³⁾と述べ、さらに、「清白鏡」の銘文の誤脱を指摘して次のように述べている。

中国のものにもこのような例があり、直ちに当時の日本では文字が全く理解されずに、単なる文様の一つとしかみられなかったということにはならないとおもう。

また同論文では、「清白鏡」銘文の訓読を行い、銘文中の字句「承驩」を「こころとり」と読み、この意味に近い語例を宮島達夫著『古典対照語い表』から『源氏物語』宿木巻に一例のみ存在することを見つけたとして、以下のように述べている。⁽¹⁴⁾

このような複雑な心理的な用語がそのまま用いられたか疑問かもしれないが、ともかくこのような意味の日本語で理解されたであろう。

このように、林の論文は、弥生時代の「清白鏡」が影響を及ぼした後代の文学の事例として、『万葉集』、『源氏物語』を挙げている。

3 「清白鏡」銘文の社会的注目度から見た上記2の考察の必要性

ところで、「清白鏡」とその銘文は、近年、新聞記事や高校教材に取り上げられ、社会的注目を増している。例を挙げると、2005年9月24日の読売新聞朝刊の記事で(図3)、「九州国立博物館に前漢鏡を貸し出す」という見出しに続き、銘文については「鏡の裏には左遷されて都や主君を思う漢詩が刻まれている。」と『楚辞』の概要が説明されるとともに、「文字も鮮明で保存状態が良く、貴重な資料」と高い評価を受けている。次に、高校社会科の副教材である『ビジュアルワイド図説日本史』⁽¹⁵⁾に「清白鏡」が掲載されている(図4)。ここでは、銘文の内容や『楚辞』との関連については触れられていない。

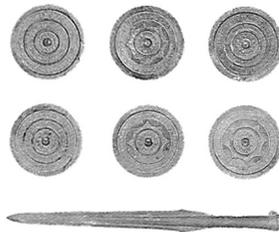
こうした状況の中、「清白鏡」銘文に関する異なる二つの説について、どちらがより妥当な見解であるかを検証することは極めて重要であると思われた。そこで、修士論文では、その解決に向けた調査に着手した。

図3 読売新聞 朝刊 2005年9月24日付



本稿での、この記事・写真は、読売新聞社の許諾を得て転載している。
(無断複製、頒布等著作権を侵害する一切の行為は禁止されている。)

図4『ビジュアルワイド図説日本史』p26掲載
3.多様化する墓制—支配層の登場へ



●副葬品をもつ墓
B.C.100年ごろの福
岡県立岩遺跡の硬棺
墓から出土した銅矛
と6面の中国製の銅
鏡。このころから九
州北部に豪華な副葬
品をともなう王墓や
有力者の墓が出現。

4 銘文に関する二つの見解についての考察の糸口—『楚辞』「九弁」の引用傾向の相違—

「清白鏡」に関する二つの説の懸隔について具体的検証ができないかと考え調査を開始して間もなく、その手がかりとなるものが見つかった。それは、「清白鏡」の銘文及び『万葉集』とほぼ同時期に制作が行われた日本最古の漢詩集『懐風藻』⁽¹⁶⁾に於ける『楚辞』「九弁」の引用傾向の違いであった。この違いを手がかりに考察を進めた所、「清白鏡」とその銘文に関しては、岡崎(晋)の第二の説や西谷、鶴両氏の見解が妥当ではないかという結論に達した。加えて、この結論は、日本に於ける「清白鏡」と銘文の位置付けの再確認をする作業になるとともに、日本文学に於ける「九弁」引用の特徴をも明らかにすることにもなったと考えられる。本論文は、こうした考察の過程を述べたものである。

第一章『楚辞』と飯塚市立岩遺跡「清白鏡」

第一節「清白鏡」に於ける『楚辞』引用の状況

銘文と対応する『楚辞』の文辞については、岡崎(敬)論文、駒井論文、三沢論文などによって既に紹介されている。これらに独自に漢籍データベースを用いて検索を行い、新たに銘文と対応すると思われる箇所調査結果を基に作成した一覧表が以下の表1である。⁽¹⁷⁾ 論述の便宜上、表には下記1～4の工夫をした。

- 1 外銘帯の各銘文には、①～⑨の番号を付し、内銘帯の各銘文には、⑩～⑬の番号を付した。
- 2 銘文の基になったと思われる『楚辞』の原文には(1)～(28)の番号を付した。
- 3 上記2を主張する諸説については、「説」の項目を設け、駒井論文は「駒」、岡崎(敬)論文は「岡」、三沢論文は「三」、筆者(佐伯)が新たに言及するものは「佐」を記入した。
- 4 表中の「『楚辞』の該当部分」の引用は、新釈漢文大系34『楚辞』(明治書院)に拠った。

表1

種類	銘文		『楚辞』の該当部分		作者	諸説	
	原文	書き下し文	原文	作品名			
〔外銘帯〕重圍(2号鏡・3号鏡) 連弧文(5号鏡・8号鏡)	① 絜清白而事君	清白を絜くして、君に事えしも、	(1) 伏清白以死直兮	離騷(第六段)	屈原	岡	
			(2) 精色内白類任道兮	九章(橘頌)			屈原
			(3) 竭忠誠以事君兮	九章(惜誦)	屈原	岡	
			(4) 事君而不貳兮				屈原
	② 窻汙驩之弁明	驩を汚がれ、明を弁れるを窓む。	(5) 忠昭昭而願見兮 然霧噓而莫達	九弁(第八段)	宋玉	駒	
			(6) 願皓日之顯行兮 雲蒙蒙而蔽之				
	③ 伋玄錫之流澤	玄錫の流沢を伋し、	(7)	〔玄錫〕は、鏡の金属成分を表すとされる。			
	④ 恐疎遠而日忘	疎遠にして、日に忘らるるを恐る。	(8) 道卓遠而日忘兮	九章(抽思)	屈原	岡	
⑤ 懷糜美之窮噉	糜美の窮噉を懐い、	(9)	〔糜美〕は「立派な男性」を言う		三		
⑥ 外承驩之可兌	承驩の説ぶべきを外にし、	(10) 外承歡之汙約兮	九章(哀郢)	屈原	佐		
⑦ 慕突佻之靈景	突佻なる靈景を慕う。	(11) 子慕予兮善窈窕	九歌(山鬼)	屈原	佐		
⑧ 願永思而母絕	願わくは、永えに思いて絶ゆる母らんことを。	(12)					
5号鏡のみ	⑨ 清光哉直佳人	清光なるかな、佳人に宜し。	(13) 問佳人兮召余	九歌(湘夫人)	屈原	佐	
			(14) 惟佳人之永都兮	九章(悲回風)	屈原	佐	
			(15) 惟佳人之獨懷兮				
〔外銘帯〕重圍〔清白〕(2号鏡・3号鏡)	⑩ 内清質以昭明	内は清質にして以て昭明なり。	(16) 精色内白類任道兮	九章(橘頌)	屈原	駒	
			(17) 恐情質之不信兮	九章(惜誦)			屈原
			(18) 彼日月之照明兮	九弁(第八段)	宋玉	駒	
			(19) 令昭明兮開門	九懷(危俊)	王褒	駒	
	⑪ 光輝象夫日月	光輝は夫の日月に象たり。	(20) 與日月兮齊光	九歌(雲中君)	屈原	岡	
			(21) 與日月兮同光	九章(涉江)	屈原	岡	
			(22) 彼日月之照明兮	九弁(第八段)	宋玉	駒	
	⑫ 心忽揚而願忠	心は忽ち揚りて忠を願う。	(23) 竊不自料而願忠兮	九弁(第八段)		岡	
			(24) 雖願忠其焉得	九弁(第五段)	宋玉	岡駒	
			(25) 紛純純之願忠兮	九弁(第九段)		岡駒	
	⑬ 然壅塞而不泄	然れども壅塞して泄らず。	(26) 心純脛而不泄兮	九章(惜往日)	屈原	岡駒三	
			(27) 路壅絕而不通	九弁(第五段)	宋玉	岡	
(28) 道壅塞而不通兮			哀時命	嚴忌	岡		

第二節 「九弁」第五・八・九段と「清白鏡」銘文引用箇所の確認

表1から「九弁」引用を抜き出したのが下記表2である。「九弁」の「第五段」、「第八段」、「第九段」から合計8個の引用があり、「第八段」に5個と引用の大半が集中していることが分かった。

表2 (表1より「九弁」の引用を抜粋)

作品名	諸 篇	引用数	合計
九 弁	第五段	2	8
	第八段	5	
	第九段	1	

また、表2の具体的な引用箇所は表1にあるように、外銘帯が(5)・(6)で、内銘帯が(18)・(22)・(23)・(24)・(25)・(27)であった。これらの内容について、現代語訳を並べてみると、以下のように、屈原の不遇と嘆きが色濃く描かれた部分であった。

- (5) 私の真心は誠に明らかで、それを君に見せたいと思うのであるが、このように暗く隠して、君王に達する方法もない。〔第八段〕
- (6) 輝く日光が私の行ないを照らし顕わしてくれるように、君が認めて下さることを願うのであるが、雲が暗く重なって蔽うのに似て、讒邪の者が君王の目をふさぐのである。〔第八段〕
- (18) あの日月の明るく照らす光にも、やはり暗くかげって瑕^{きず}があるものである。〔第八段〕
- (22) 上記(18)に同じ。〔第八段〕
- (23) 私は心のうちで、自分の力量も料^{はか}らずに、忠を尽くしたいと思っていると、或る者は、私に悪名をつけて、汚れたものとする。〔第八段〕
- (24) 君王が人物を自分で棄て遠ざけて、よく明らかに知らなければ、その人は忠を尽くしたいと願っても、どうしてできよう。〔第五段〕
- (25) 心をくだき、もっぱらに、真心を尽くしたいのであるが、私をねたむ者どもが立ち並んでこれをさまたげるのである。〔第九段〕
- (27) 自分から近路をまっすぐに君の所へ行きたいと思えば、路はふさがり絶えて通じない。〔第五段〕

第二章『懐風藻』に見る『楚辞』「九弁」の引用傾向

第一節 『懐風藻』に於ける『楚辞』

『楚辞』が日本へ伝来した正確な年代は明らかではないが、『楚辞』について記された最も古い資料『大日本古文書』第一巻、天平二年(730)七月四日の写書雑用帖正倉院文書に「離騷三帙別十六卷」とある。⁽¹⁸⁾「離騷」とは屈原の代表作であるが、意味するところは王逸注『楚辞』十六巻のことと思われ、『日本国見在書目録』の「楚辞十六 王逸」とあるのと同種の本と推定されている。また、書写されているということから、『楚辞』伝来はもっと早かったと推測される。

一方、『懐風藻』について、藤野岩友は「楚辞の近江奈良朝の文学に及ぼした影響」⁽¹⁹⁾の中で、

「楚辞の懐風藻に対する影響のうち、際だっではっきりしているのは九辯からのものである。」と述べている。そこで、ここでは『懐風藻』に見られる『楚辞』引用例⁽²⁰⁾を詳細に確認していきたい。引用例は下表3にまとめた。論述の便宜上、表には下記1～6の工夫をした。

- 1 『楚辞』引用が確認された『懐風藻』の作品別に①～②⑩の番号を付した。
- 2 『楚辞』引用が確認された『懐風藻』の詩文には(1)～(28)の番号を付した。
- 3 上記2の『懐風藻』と『楚辞』の原文は、該当部分を対応させて(1)～(28)の番号を付した。一つの詩文に複数の引用例が挙げられている場合は、i～vのローマ数字を付した。
- 4 上記3に関する先行研究は以下で、表中「説」の項に、藤野論文は「藤」、山岸論文は「山」、小島論文は「小」、芳賀論文は「芳」、辰巳論文は「辰」、島田論文は「島」、波戸岡論文は「波」を記入した。
 - ①藤野岩友については上記論文と同じ。
 - ②山岸徳平「懐風藻の成立」⁽²¹⁾
 - ③小島憲之『上代日本文学与中国文学 下一出典論を中心とする比較文学的考察一』⁽²²⁾
 - ④小島憲之校注『日本古典文学大系69懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(注釈・補注)⁽²³⁾
 - ⑤芳賀紀雄『萬葉集における中國文學の受容』⁽²⁴⁾
 - ⑥辰巳正明「懐風藻の自然と自然観の成立 「物色」と第三の自然をめぐって」⁽²⁵⁾
 - ⑦島田伸一郎「移り変わる季節 『懐風藻』の秋の詩」⁽²⁶⁾
 - ⑧波戸岡旭「『懐風藻』の自然描写 長屋王邸宅宴閑連詩を中心に」⁽²⁷⁾
- 5 表中の「『懐風藻』」の引用は、日本古典文学大系69『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(岩波書店)に、『楚辞』の引用は、新釈漢文大系34『楚辞』(明治書院)に拠った。
- 6 表中の『懐風藻』詩文について、本稿で取り上げないものは、詩文の中間を省略した。

表3

	『懐風藻』				『楚辞』			説	
	作品名	引用文	作者		作品名	該当部分	作者		
①	懐風藻序	軫悼 ⁽¹⁾ 傷懷。	-	(1)	哀時命	志浩蕩而傷懷	嚴忌	小	
②	春日、應詔。14	⁽²⁾ 惠氣四望浮。	紀麻呂	(2)	天問、第一段	伯強何處 惠氣安在	屈原	小	
③	遊吉野。31	命爵 ⁽³⁾ 薜蘿中。	藤原史	(3)	九歌、山鬼	被薜荔兮帶女蘿	屈原	藤	
④	詠美人。34	⁽⁴⁾ 留客令忘歸。	荊助仁	(4)	i	九歌、山鬼	留靈脩兮憺忘歸	屈原	藤
					ii	九歌、東君	觀者憺兮忘歸		
					iii	九歌、河伯	日將暮兮悵忘歸		
					iv	遠遊、第七段	欲度世以忘歸兮		
					v	九歌、離世	情慌忽以忘歸兮		
⑤	宴長王宅。50	咸 ⁽⁵⁾ 有不歸情。	境部王	(5) (6)	i	九歌、山鬼	留靈脩兮憺忘歸	屈原	藤
					ii	九歌、東君	觀者憺兮忘歸		
					iii	九歌、河伯	日將暮兮悵忘歸		

⑥	秋夜宴山池。51	(6) <u>忘歸待明月。</u>			iv 遠遊、第七段 v 九歎、離世	欲度世以忘歸兮 情慌忽以忘歸兮			劉向
⑦	秋日於長王宅宴新羅客。并序。	兼陳 (7) <u>南浦之送。</u>	山田三方	(7)	九歌、河伯	送美人兮南浦	屈原	小藤波	
⑧	秋日於長王宅宴新羅客。63	(8) <u>新知未幾日。</u>	刀利宜令	(8)	九歌、少司命	樂莫樂兮新相知	屈原	藤	
⑨	秋日於長王宅宴新羅客。并序。賦得前字。	(9) <u>秋氣可悲。宋大夫於焉傷志。</u> (10) <u>寒雲千嶺。涼風四域。</u> <u>白露下而南亭肅。蒼烟生以</u> <u>北林藹。</u> (11) <u>草也樹也。搖落</u> <u>之興緒難窮。觴兮詠兮</u> (12) <u>登臨之送歸易遠。</u> 飛 (13) <u>西傷之華篇。</u> 繼 (14) <u>北梁之芳韻。</u>	下毛野蟲麻呂	(9)	九弁、第一段	悲哉秋之爲氣也	宋玉	藤原島	
				(10)	九弁	「九弁」の悲秋の興趣に呼応させたもの	宋玉	波	
				(11)	i 離騷、第一段	惟草木之零落兮恐美人之遲暮	屈原	藤	
				(11)	ii 九弁、第一段	蕭瑟兮草木搖落而變衰	宋玉	藤小	
				(12)	九弁、第一段	登山臨水兮送將歸	宋玉	藤	
⑩	秋日於長王宅宴新羅客。賦得秋字。79	(15) <u>南登踐送秋。</u> 未盡 (16) <u>新知趣。</u>	吉田宜	(15)	九弁、第一段	登山臨水兮送將歸	宋玉	藤	
				(16)	九歌、少司命	樂莫樂兮新相知	屈原	藤	
⑪	於左僕射長王宅宴。82	即是 (17) <u>忘歸地。</u>	箭集蟲麻呂	i	九歌、山鬼	留靈脩兮憺忘歸	屈原	藤	
				ii	九歌、東君	觀者憺兮忘歸			
				iii	九歌、河伯	日將暮兮悵忘歸			
				iv	遠遊、第七段	欲度世以忘歸兮			
				v	九歎、離世	情慌忽以忘歸兮			劉向
⑫	待宴。87	(18) <u>鼓柵遊</u> (19) <u>南浦。</u>	藤原總前	(18)	九歌、河伯	送美人兮南浦	屈原	藤小 小藤秀	
				(19)	漁父	鼓柵而去			
⑬	暮春曲宴南池。88	醉裏 (20) <u>不忘歸。</u>	藤原宇合	i	九歌、山鬼	留靈脩兮憺忘歸	屈原	藤	
				ii	九歌、東君	觀者憺兮忘歸			
				iii	九歌、河伯	日將暮兮悵忘歸			
				iv	遠遊、第七段	欲度世以忘歸兮			
				v	九歎、離世	情慌忽以忘歸兮			劉向
⑭	在常陸贈倭判官留在京。并序。89	懸榻長悲 (21) <u>搖落秋。</u>		(21)	i 離騷、第一段 ii 九弁、第一段	惟草木之零落兮 草木搖落而變衰	屈原 宋玉	藤 藤	
⑮	遊吉野川。92	野客初 (22) <u>披蓀</u> 。朝隱暫投簪。		(22)	九歌、山鬼	被蓀荔兮帶女蘿	屈原	藤	
⑯	過神納言墟。96	沈吟 (23) <u>佩楚蘭。</u> (24) <u>天闌若一啓。</u>	藤原萬里	(23)	離騷、第一段	紉秋蘭以爲佩	屈原	山	
				(24)	離騷、第十段	吾令帝閭開關兮	屈原	藤	
⑰	遊吉野川。98	(25) <u>縱歌臨水智。</u>		(25)	九歌、少司命	臨風恍兮浩歌	屈原	小	
⑱	在唐奉本國皇太子。103	壽共 (26) <u>日月長。德與天地久。</u>	釋道慈	(26)	九章、涉江	與天地兮同壽 與日月兮同光	屈原	小	
⑲	賀五八年宴。107	(27) <u>鳴求一愚賢。</u>	伊支古麻呂	(27)	七諫、諷諫	鹿鳴求其友。	東方朔	藤	
⑳	—	(28) <u>臨淵吟潭。寫心文藻。</u>	石上乙麻呂	(28)	漁父	游於江潭、行吟澤畔	屈原	小藤	

上記の表3から『懷風藻』に於ける「九弁」の引用状況を抜粋したのが、下記である。

作品名	諸篇	引用数	合計
九弁	第一段	5	<u>5</u>

この結果から『懷風藻』の「九弁」の5箇所の引用(9)・(11)・(12)・(15)・(21)は、全て「第一段」に集中していることが分かった。これが『懷風藻』に於ける「九弁」引用の特徴であり、現代語訳を並べてみると以下のように「清白鏡」銘文とは趣が異なる「悲秋」の内容であった。

- (9) 悲哉秋之爲氣也 悲しいかな、秋の気たるや。
 (11)(21) 蕭瑟兮 草木搖落而變衰 蕭瑟たり(風は寂しく鳴り)、草木搖落して(吹き散り) 變衰す。
 (12)(15) 登山臨水兮 送將歸 山に登り水に臨み、將に帰らんとするを送るが若し。

第二節 『懷風藻』に於ける「九弁」の引用内容

ここでは「九弁」の「第一段」を引用した『懷風藻』の作品(表中⑨⑩⑭)の該当部分を挙げて詳しく見ていくことにする。(詩題は、書き下し文で記した。)

- ⑨「秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。并せて序。賦して「前」の字を得たり。」下毛野蟲麻呂
 (9) 秋氣可悲。宋大夫於焉傷志。 秋氣悲しぶべし、宋大夫焉に志を傷ましめつ。
 (11) 草也樹也。搖落之興緒難窮。 草かも樹かも、搖落の興緒(散りゆく情緒)窮まること難し。
 (12) 觴兮詠兮。登臨之送歸易遠。 觴かも詠かも(盃と詩で送る)、登臨の送歸遠ざかること易し。
 ⑩「秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。賦して「秋」の字を得たり。」吉田宜
 (15) 南登餞送秋。 南登(長屋王の南堂) 餞送の(送別の宴をした) 秋。
 ⑭「常陸に在るときに、倭判官が留りて京に在すに贈る。」藤原宇合
 (21) 懸榻長悲搖落秋。 榻を懸けて(椅子を出し來遊を待つ) 長く悲しぶ搖落(落葉)。

上記の⑨下毛野蟲麻呂と⑭藤原宇合の詩に引用された「九弁」について、藤野は「蟲麻呂の場合は、儀礼的な送別の宴における制作であるから、九辯の悲秋の情と異なるものがあるのは当然である。それに比して宇合の詩は遠い異郷に在って京の不遇な親友に寄せたものであるから、自ら悲秋の実感が出ているのである。」と指摘している。⁽²⁸⁾このように、『懷風藻』の「九弁」引用は、「第一段」に集中し、「秋を悲しむ」内容で、「悲秋文学」と称されるものである。

第三章「悲秋文学」の受容様相

「悲秋文学」とは、秋の景物に自己の悲しみを表現するもので、屈原の作品に表われた感情⁽²⁹⁾を、「九弁」全篇の主題として宋玉が完成させ、中国、日本双方の文学で受け継がれている。

第一節 中国文学に於ける「九弁」の引用

まず、前漢の武帝の「秋風の辞」⁽³⁰⁾には、「九弁」の秋の叙景を引用した「草木黃落」「鴈南歸」の字句がある。

草木黄落兮鴈南歸　　草木黄ばみ落ちて雁南に帰る

つづいて、六朝時代では、高橋忠彦が「全体に宋玉の『楚辞』『九弁』、特にその第一首の影響が強い」⁽³¹⁾と指摘する、潘岳（247～300）の「秋興賦」がある。

悲哉秋之爲氣也　　悲しきかな秋の氣為るや

颺瑟兮草木搖落而變衰　　颺瑟として（寒風吹きすさんで）草木揺落して変衰し

その後、唐代の杜甫（712～762）が、「登高」⁽³²⁾で次のように詠じている。

風急天高猿嘯哀　　風急に天高く猿嘯き哀しみ

万里悲秋常作客　　万里　悲秋　常に客と作り

この後、白居易（772～846）も「悲秋文学」を受容している。⁽³³⁾

第二節 日本文学に於ける「九弁」の引用

「悲秋文学」は、日本文学に於いても受容されている。例えば、『万葉集』では、藤野岩友が「楚辞の近江奈良朝の文学に及ぼした影響」⁽³⁴⁾で、次の額田王の長歌を取り上げている。

天皇、内大臣藤原の朝臣に詔して、春山万花之艶、秋山千葉之彩を競憐はしめたまふ時、
額田王の歌を以ちて判れる歌。

冬ごもり　春さり来れば、鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ。咲かざりし　花も咲けれど、山
を茂み　入りても取らず、草深み　取りても見ず。秋山の　木の葉を見ては、黄葉をば
取りてぞしのふ。青きをば　おきてぞ嘆く。そこし恨めし。秋山われは。

藤野は、ここで額田王が秋が春に優ると判定する理由について、「中国からの影響による悲秋文学の目に見えない圧力」によるものと考えており、また、その影響を受けながらも、それが判歌の上に現れないことについては、「その影響が浅く、公的儀礼的な雅会において自由に表現するほどの程度に達していなかったためではあるまいか」と指摘している。さらに、額田王の作品で「悲秋文学」の影響の強いものとして、「額田王近江の天皇を思ひて作れる歌。」を紹介している。

君待つと　わが恋ひをれば、わが屋戸の　簾動かし、秋の風吹く。

この歌については、「悲秋文学として欠くことのできない風物たる「秋風」が出ていること」に着目している。

さらに平安初期の勅撰三集にも「悲秋文学」の影響が見られる。『凌雲集』については、藤野が「凌雲集に対する楚辞の影響は、九辯が中心になっている」と述べている。⁽³⁵⁾ また、『文華秀麗集』⁽³⁶⁾、『経国集』⁽³⁷⁾にも「九弁」第一段の「悲秋」の引用が伝統的に受け継がれている。

おわりに

ここで改めて、「清白鏡」の銘文に関する異なる二つの説を確認すると以下である。

第一の説 林 勉によるもので、弥生時代の日本人に「清白鏡」の銘文が文学的覚醒のレベルで受け入れられたとする見解。

第二の説 岡崎（晋）によるもので、弥生時代の権力者たちが屈原の故事を知り、吉祥句の文章を理解していたことは、はなはだ疑問である、という見解。また、西谷、鶴は、漢字が渡来し、当時の日本人が初めて文字に接した時は、文様と思ったであろうという見解を示している。

本論では、二つの説の懸隔を考察する手がかりとして「清白鏡」銘文と『懐風藻』に於ける『楚辞』の「九弁」引用の傾向が全く違っていることに着目し調査した所、下記が判明した。

①「清白鏡」銘文は、「九弁」の「第五段」、「第八段」、「第九段」からで、内容は屈原の不遇と嘆きが色濃く描かれた部分であった。

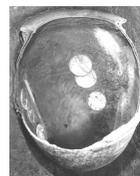
②『懐風藻』の「九弁」引用は「第一段」に集中し、内容は悲秋の実感であった。

③上記②の引用傾向は、『万葉集』をはじめ平安期の日本文学にも脈々と引き継がれていた。この結果により、仮に、第一の説の林 勉が説くように、「清白鏡」銘文が当時の日本人から「文学的覚醒」を及ぼす程に理解されていたのであれば、後の文学作品にその痕跡が片鱗も残っていないのは、不可解な現象のように思われ、第二の説の岡崎（晋）の「当時の権力者は屈原の故事を理解していなかった」とする見解がより実態に即したものであるという結論に至った。

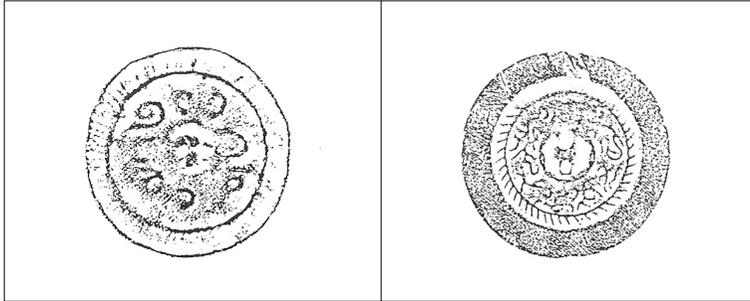
そして、この結果は、もう一つの事実を物語るものとなった。すなわち、日本の歴史的、考古学的資料としての立岩遺跡出土「清白鏡」とその銘文の位置付けの再確認ができたということである。「清白鏡」は前漢時代の『楚辞』の流行という背景の中で作られ、その銘文を通して日本に伝わった隷書体の漢字が弥生時代の日本人に文様としての文字への興味をよび起し、仿製鏡に見られる文字の模倣といった異文化の受容行動へとつながっていったと言えるのではないだろうか。

注：本論文は、本学大学院人間科学研究科で取り組んだ修士論文に、口頭試験に於いて桐島薫子教授（研究指導教員・主査）、迫野虔徳教授（副査）、板井修一教授（副査）より質問やご批評頂いたことを参考に加筆・修正したものである。さらに、本論文の執筆に当たっては、飯塚市歴史資料館の学芸員樋口嘉彦氏より「清白鏡」及び銘文に関する資料の提供や多くの教えを頂いた。また、研究科の授業や中間発表会、文学部日本語・日本文学科で学んだことも大変役立った。ご指導頂いた先生方に心より感謝申し上げる次第である。

- (1) 立岩遺跡出土の「清白鏡」を含む鏡は、右のように、甕棺墓の中に納められた状態で出土している。
（『飯塚市歴史資料館展示解説』 p5 1998年9月）



- (2) 『古鏡の研究』富岡益太郎発行 1920年2月
- (3) 『中国古鏡の研究』岩波書店 1953年7月
- (4) 「福岡県立岩遺跡発見の前漢鏡とその銘文」(『史淵』通号99 p77～90 1968年1月)
『立岩遺蹟』立岩遺蹟調査委員会(代表 岡崎敬)河出書房新社1977年3月
- (5) 『楚辭新研究』汲古書院 p234 2002年12月
- (6) 「楚辭と漢鏡銘」(『神戸国際大学紀要』第46号 p105～119 1994年6月)
- (7) 台湾中央研究院「漢籍電子文獻」(<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>)
- (8) 『筑紫語文』第16号 p44～60 2007年11月(「中国関係論説資料」第51号所収予定)
- (9) 『国語と国文学』第67巻 第3号 p5 1990年3月
- (10) 中央公論社 p383 1988年3月。下記の図は、日本人が中国から伝わった鏡を真似て作った仿製鏡である。立岩遺跡から仿製鏡は出土していないため、同じ北部九州に位置し、弥生中期後半の甕棺より「清白鏡」が出土した佐賀県二塚山遺跡出土の仿製鏡の拓本をここに参考として紹介しておく。(同書 p85)



- (11) 『九州文化史研究所紀要』36号 p61～85 1991年3月
- (12) 『和漢比較文学叢書 第二巻 上代文学と漢文学』和漢比較学会p235 1986年9月
- (13) 注9に同じ。
- (14) 論文に詳細な記載がなかったため、同書で確認したところ、p116に「こころとり(心取り) 源1」とあった。
- (15) 東京書籍編集部 東京書籍 1997年2月
- (16) 林は、銘文の字句の影響が『万葉集』に見られる例を挙げている。しかし、『万葉集』に於いても、『懐風藻』と同じく『楚辭』『九弁』の影響を受けた確実な文言がある。そのため、本稿では、『万葉集』よりも早期に成立し、「漢文」で書かれている『懐風藻』を比較の対象として採用した。
- (17) 注8に同じ。p49
- (18) 東京大学資料編纂所「奈良時代古文書フルテキストデータベース」(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>)
- (19) 『東洋研究』第40号 p7 1975年4月
- (20) 注19の藤野論文では、日本文学に於ける『楚辭』の引用は『文選』からの影響もあると述べている。「九弁」に関しては、『文選』に採録されているのは第一段から第五段までである。『文選』に見えない作品からの引用は、本稿の表3では(1)、(2)、(4) ii～v、(5) ii～v、(6) ii～v、(7)、(15)、(17) ii～v、(18)、(20) ii～v、(27) にあたる。これらの作品について、同論文には、『楚辭』からの影響と見られる、とある。
- (21) 『山岸徳平著作集 I 日本漢文学研究』有精堂出版株式会社 p82 1972年5月
- (22) 塙書房 1907年3月

- (23) 岩波書店1975年6月
- (24) 塙書房 p 221 2003年10月
- (25) 辰巳正明 編『懐風藻 日本の自然観はどのように成立したか』笠間書院 p 25～28 2008年6月
- (26) 注25に同じ。p 53～54
- (27) 注25に同じ。p 133
- (28) 注19に同じ。p 9
- (29) 例えば、「九章」・抽思に「悲秋風之動容兮、何回極之浮浮、数惟孫之多怒兮、傷余心悽悽」とある。
- (30) 内田泉之助監修・石川忠久編『中国の名詩鑑賞3 古詩』明治書院 1993年6月
- (31) 『新釈漢文大系第81巻 文選(賦篇)下』明治書院 2001年7月
- (32) 松浦友久『校注 唐詩解釈辞典』大修館書店1987年11月
- (33) 遠藤寛一は、「長恨歌の研究(五) — 「長恨歌」に詠まれた悲秋の感情—」(『江戸川女子短期大学紀要』第13号 1998年3月)で、「白居易が杜甫の詩を継承した理由はその似通った境遇に拠るところが多いからであろう。またそれ故に、屈原と宋玉の悲秋の伝統を杜甫の詩を通じて受け継いだものといえよう。」と述べている。
- (34) 注19に同じ。p 20～26
- (35) 「平安朝の漢詩文に及ぼした楚辞の影響」(『東洋研究』通号46 p1～60 1977年5月)
- (36) 『文華秀麗集』に於ける「九弁」引用は、「神泉苑九日搖落篇」にみられることを、井実充史が「なぜ重陽節において悲秋文学が詠まれたのか— 「文華秀麗集」 「落葉篇」の制作事情—」(『言文』通号49 p30～39 2002年3月)で指摘している。
- (37) 卷一、賦類。太上天皇「重陽節、神泉苑賦秋可哀」(重陽の節、神泉の苑にて秋哀しむべしというふことを賦す)には、「九弁」第一段の冒頭「悲哉秋之為氣也」を引用している。

(さいき はるえ：2009年度大学院修了)